

コロナ禍により事業環境が大きく変化し、企業はさまざまな課題を突きつけられている。DXの流れを受けたセキュリティ体制の強化、レポーティングラインやクライアントとの直接対話が減ることに伴うマネジメントやリーダーシップのあり方など、ニューノーマルに向けた整備が急務である。ここ数カ月間に、今まで10年スパンの中期的な課題としてとらえていた問題を、短期間で解決しなければならない状況に急変した。

だが、外部環境の変化は激しく、変化に応じた対処やプロセスも数年後には色あせ、また新たなノーマルが求められるだろう。PDCAは大事だが、これからはそのサイクルと適度な距離を保ちつつ、発想を大胆に、常に変容し、時代に即して脱皮し続けなければ生き残れないのではないかと。そうした意識をすでにもって実践しているチームからすれば、常にあるべき姿=ノーマルを追い求めて変化し続けているわけで、ニューノーマルという言葉自体がナンセンスな響きだろう。目指すべきノーマルを求めて常に変化するためには、どうすればよいのか。今生じているシフトは、変革や学びの好機と思われる。

総務部長 田丸伸介

海外投融資

Vol.29 No.6 (通巻174号)
2020年11月25日発行

発行
一般財団法人 海外投融資情報財団

発行人
日塔 貴昭
〒102-0073
東京都千代田区九段北二丁目
3番6号 九段北二丁目ビル
TEL. 03-5210-3311(代)
URL. www.joi.or.jp

制作協力
(株)エディポック

*本誌に掲載されている記事の内容や意見は、海外投融資情報財団の公式見解を示すものではありません。

●禁 無断転載

All rights reserved. No part of this magazine may be reproduced in any form or in any means without written permission from the publisher.
©Japan Institute for Overseas Investment Printed in Japan



九段だより バーのある人生(9) 夜の街で飲む、ということが昔話になる世界

20XX年、ネオトーキョー、ギンザ。

ここは、廃墟と化したビルが並ぶ死の街である。かつては「夜の首都」と言われ、高級飲食店やバー、「クラブ」と呼ばれる酒場が林立していた。しかしある時、深刻な疫病が大流行し、感染の中心という噂が立ったため人が来なくなって皆潰れてしまった。地権者は昔の栄光にアグラをかき、また土地建物の権利が細分化されていたため、街を再生させる対策が打たれることもなく、空きビルは放置された。

当時、女性店員が男性客を接待する「クラブ」という酒場には、夜な夜な政財官界、文化・スポーツ界などのあらゆる成功者が集まり高級酒の瓶が次々に空けられていた。クラブの上客はときに最員の女性店員を伴ってギンザの

バーや高級飲食店にも繰り出し、そうした店も繁盛していた(それらの支払いの多くは客個人のサイフではないところで賄われていたという説があるが真偽は定かではない)。

疫病の蔓延はネオトーキョーの有り様を大きく変えた。それまで人々は毎日ネオトーキョーの中心に集まって仕事をしてしたが、今では

高速5G通信環境が整った郊外や地方の自宅で会議や商談など不自由無くこなして働くようになった。自宅を出る必要が無くなったので、飲食店もテイクアウトや配達サービスが当たり前になり、たまに外食を楽しむような場合でも、ギンザのような中心地にわざわざ出向くようなことは無くなった。

ギンザの片隅に、小さな一軒のバーが残っていた。外の閑散とは対照的に店内のカウンターはすべて埋まっていた。昔のギンザを知る高齢の客に交じって一人の若い客が初老のバーテンダーに眩くように話していた。

「テレワークのおかげで生活も仕事も快適だけど、何か物足りないんです。それが何か、といっても思いつかないのだけど。ただ、ギンザにバーが残っていると聞いて、その足りない何か、があるんじゃないかと思って来てみたんです。」

その客は、姿勢を正してマティーニを舐めていた。その表情はとても満ち足りているように見えた。それから小一時間が過ぎ、次に頼んだウイスキーを飲み干したところで彼は時計を見た。「あ、もう20時。終電だから帰らなきゃ。」

急ぎ足で駅に向かう途中、何処かからカラオケの音が聞こえてきた。かつて高級クラブが軒を連ねていた建物に一軒の酒場の看板があり、中で誰かが歌っていた。彼にとって初めて聴くその歌は、河島英五の「時代おくれ」であった。

専務理事 日塔 貴昭



写真は本文と一切関係ありません。